



## 特 集 「子育て層・若い世代」と生協

かつて生協は「子育て中のお母さんの組織」だった。子どもを産み、育てる中で食の「安心・安全」に興味を持ち、ニーズを抱いた人々が組合員の中心だったのである。

しかしいまや生協組合員の平均年齢は53歳だという。子育てが一段落した人々が現在の生協を支えている。若い人々にとって、もはや生協は魅力ない存在なのだろうか。どうすれば若年世代に支持される生協をつくることができるのだろうか。

### 座談会 若い世代の職員が考える魅力ある生協とは —子育て層を中心に—

近年、生協の組合員における若い世代の比率の低下が顕著に見られる。そこで今号の特集では、若い世代（20代～30代）の比率低下の背景やその理由、さらに今後の課題や解決の方向について、若い地域担当職員の目線から、率直に語り合っていただいた。

#### 座談会出席者（敬称略）

今 さや佳（市民生活協同組合ならコープ 北部支所 地域担当）

古山 陽子（生活協同組合おおさかパルコープ 寝屋川支所 地域担当）

山本 深雪（生活協同組合コープしが 甲南センター 組合員担当 現在は共済事業フロア共済推進チーム）

渡辺 晶（京都生活協同組合 洛南支部 地域担当）

二場 邦彦（司会・当研究所研究委員、立命館大学名誉教授、京都生協理事長）

#### 若い世代の組合員の概況

【二場】 まずははじめに、みなさんが担当されているコースの特徴と、そこでの若い世代の状況やそれについて感じたことについて、それぞれ率直にお聞かせください。



【古山】 私が担当しているのは大阪府交野市星田という地域で、山と平地の境目という感じです。平均年齢は約45歳で、子育て世代の若い人は4分の1ぐらいです。マンションやハイツがポツポツ建っていて、そこに新婚の方など若い人が住んでおられます。若い人の生協の加入率は高いとはいえない。また、若い方は利用の個人差が大きくて、「ほとんど生協です」とおっしゃるぐらい利用されている方もあります、毎週2,3点しか購入されないような方もあります。

【今】 私は、奈良市の中心部（東大寺や県庁、近鉄奈良駅前）などを配達しています。古い街並みで、高齢者が多い地域です。若い方の比率は組合員さん6人に1人ぐらいです。マンションにお住まいで、小学校以下の子さんがいらっしゃる

ようなご夫婦が多いですね。お買い物は、大型スーパーが近くないので、昔からある食品スーパーと生協を併用されているようです。

【山本】 私が昨年まで配達していた滋賀県南部の甲南町は、大阪や京都にお勤めの方のベッドタウンとして新築の大型団地が増えつつあるので、駅近くの団地などでは20代で家を建てられた方がけっこう増えています。この地域は、コープしが全体の中では加入率はそれほど高くありませんが、甲南センターのお年寄りが多い地域よりも加入率は高いほうです。

【渡邊】 私は京都府宇治市の楳島町という、工場と田んぼがある地域を配達しています。細い道が続く旧村や旧市街地もあれば、田んぼの真ん中に住宅がぎっしり建てられているなどところもある地域です。新興住宅地が少しずつ増えてきて、そういうところに子育て世代も移り住んでおられます。

#### 若い世代の加入のきっかけ

【二場】 まず、若い人に組合員として加入してもらうためのきっかけをどう見つけていくか、についていかがでしょうか。

**【今】** 私が加入してもらうために最初に聞くのは「生協、知っていますか?」です。「お母さんがやっていた」とか「小さいときはうちで取っていた」とか、何かの関わりがある方は、それを思い出してもらって、そこから現在の「個配なので時間に拘束されません」という話をします。

**【渡邊】** 実家が近くにあつたり二世帯で同居される場合は、実家で生協を利用されていた方がけっこう多いので、ご実家の班に加入したり、個配を利用されたりすることが多いのですが、

そうでない場合、特に共働きのお母さんは、ご近所同士で世代が近くにお住まいでも、班はなかなか結成しにくくですね。

若い人にマニュアルトークを話すと、一応聞いてはくれるのですが、結局最後は「まだ考えときます…時間もないから…」と、なるべくこちらを傷つけないような断り方をしてくださります(笑)。心を開いているようで開いていない方が多い印象です。

**【古山】** やっぱり周りの組合員さんからの情報が大事だと思います。引っ越しや転居の情報を押さえておいて、私が話すより組合員さんが話したほうが絶対に伝わるので、一緒に行っていただけそうだったら一緒に行ってもらいます。

**【山本】** それが一番ですよね。転居してきた若い方は近所付き合いをしたことがない方が多いですが、同世代の人と近所付き合いをしたいと思っておられるので、同世代の組合員さんから言ってもらうと、心を開いてもらいやすいと思います。

他にも、私のところでは配達に行くと生協を取っていない家の子どもさんが遊びに来ていることが多かったので、「これ、めっちゃおいしいで、生協でしか買えへんし」と言って、その子にすすめるんです。子どもがお母さんに「生協っていうのが来てたで」と言ってくれたら、お母さん友達との間で、「一緒にやらへん?」という感じで始まったりします。



として「若い人が好んだり必要とする商品は何か」という考え方できます。若い人が欲しがっている商品と生協の品揃えとの関係で、何かお感じになることはありますか。

**【古山】** アレルギー対応の商品を多く扱ってほしいという声は、小さなお子さんをお持ちの方からたくさんいただきます。実際聞いてみると「実はうちの子も」とか「いまは治ったけど、昔はアレルギーだった」という話が出てきます。困っている人がいるという情報が組合員さんに伝わって、年配の方から若い方まで、気持ちのこもった「組合員さんの声カード」が100枚以上集まって、いまは月1回、専用のページを設けることになりました。

**【山本】** いま子どもさんのなかでアレルギーはすごく増えていると思います。私の子どももアレルギーで、花粉症やアトピー性皮膚炎などを持っています。

でも、小学校・中学校に行って良くなってくると、それよりも、いかに安く、いいものをよりたくさん買うかが先に立つ人が多いです。今の生協のカタログは「低価格」という、若い世代向けになってきていると思いますが、一方で、以前から生協の活動をされてきた方からは、「高くてもいいから、昔のように『安心・安全』にこだわった商品を」との声を聞きます。40~50代の方の利用高は高いと思いますが、今の品揃えは、その人たちが欲しておられる生協ブランドとは違うと思います。ニーズが二極分化しているわけです。

私自身は、生協の商品は日持ちがよかつたり、どういう育て方をされた野菜であるかを知っていて、子どもに安心できるものを食べさせたいので、やっぱり生協のものを買おうと思っています。でも、「ニーズに合わせる」というのであれば、商品やカタログも二極に分けるやり方もあるっていいのではないかと思います。

**【二場】** 若い人の場合、所得との関係で安いものを求める気持ちもあるし、子育てとの関係でアレルギー対応のような安全なものを求める気持ちもあるし、また、若い女性は自分の健康や美容と食べものとの関係も強く意識するのではないかと思います。

生協全体としては、生協本来の「安心・安全」をきちんと守ることと、もう一方では「ベーシッ

### 若い世代のニーズ

若い世代が求める商品

**【二場】** 若い世代の拡大となると、自然な発想

クス」のような、ある程度の価格帯のものを、うまく組み合わせていく必要もあるかもしれません。

## 若い世代の中での利用の個人差

【二場】 次に、冒頭で「若い人の間で、利用の多い人と少ない人がいて、個人差が激しい」というお話がありましたが、なぜそういう個人差が出てきているのか、その背景にあるものをお感じになることはありますか。

【渡邊】 私は、若い方だけのグループをつくって、お誘いするときに、「必要な分だけでも」とか「他の店にない商品だけでも」とお伝えします。そうすると、若い方だけで新しい班をつくったときに、どうしても1人あたりの利用が2~3点になってしまって、たまごや牛乳など、こだわりのある基礎商品までなかなか利用が伸びないと感じています。新しい班をつくったとき、みなさんとのところでは、基礎商品は定着しますか？

【一同】 しにくいですね。

【渡邊】 年配の方は、「たまごは生協のこれじゃないとダメ」とか言ってくださいますが、若い組合員さんの場合、なかなかそれがわかってもらえないで。

【今】 商品1点あたりの単価が下がっているので、計画どおりに利用人数を達成したとしても、供給が到達していないというのが現状です。地域担当としては、利用人数は頑張れるけれども、1人あたりの買う量は、なかなか操作できないし、おすすめして1点買ってもらうにしても、それこそ利用人数のことがあるので次の班の配達に行かないといけなくて、おすすめする時間をとるのは難しいという原状です。

【古山】 私が担当している班には、8人班で、みなさん若いのにとてもたくさん利用してくださる例もあります。私が担当し始めたときは5人班で、転居されてきた方がおられて人数が増えたのですが、転居されてきた方も、周りでたくさん買っている人たちを見て、「これだけ買うもんなんや」と思われたようです。それで、みんながお米を買っているので、その方も生協のお米を買ってくださるようになりました。その後もずっと高いベース



で続いているです。

一方、利用の少ない班では、みんなが少ないです。たまに10点ぐらい買った人がいると、他の人から「なんで、そんなに買ってんの？」と声が上がります。私は「そんなん言わんと、また引き続きよろしく！」と言っていますが（笑）。若い方はやっぱり周りを見ておられて、「あの人これ買ってる」とか「下手な物を買ったら何か言われる」という雰囲気があります。これが年配の方のグループであれば、「みんな仲間やから、誰かの分が多くても当然や」と思われるのですが。

【今】 個別宅配では、牛乳やたまごはけっこう利用されています。こういう商品は、重たいし、たまごを持ち帰るときはすごく気を遣うので。ただ、奈良はスーパーが多くて、どこも特売をして、しかも、その目玉商品はたまごが多いので、価格面ではなかなか勝てないと感じています。

【山本】 私自身、子どもが小学校に上がる前に生協に入りましたが、たまごやお米や牛乳といった基礎商品の良さがわかったのはそれからで、それまではやっぱり「価格」でした。他のスーパーにしても、たしかに安いけれど、品質の悪いものを売っているわけではないので、普通のお母さんだったら「それだったら安いほうがいい」となるんですね。

【二場】 このように見ると、安全なものを求める一方で、値段の安いものを求めるのは年配の方と案外共通していますし、若くて家族が少ないので少量パックのものが欲しいという点なども高齢者と共通している面があるように思います。

## 若い世代に対する情報提供

【二場】 世代間のニーズに一定の共通点があるとしても、若い世代には知識が乏しい面があるので、「価格と品質を総合的に見ると生協の商品はいい」ということを、若い人に本当に納得してもらおうとすると、新たに相当の情報量を提供していかなければいけないということだろうと思います。そこで、次にどうやって若い世代に情報提供していくか。商品を知らせる工夫は、どのようになさっていますか。

### 配送時の情報提供

【今】 以前、「1班あたり10分はかけよう」と

いう共同購入のコースをつくったことがありました。なかなか供給が伴わなくなりました。逆に、子会社が運営している支所で配送をしていたときは、「配達の1週間あたりの供給」を基準にしてコースを組んでいましたが、そうなると、今度は対話する時間なんて本当に取れない。生協全体の流れがそっちに向いているのではないかという不安があって、「もっと商品を伝える時間がほしい。でも、それだけじゃ、やっていけないのか」という危機感を持っています。

**【山本】** 私のところでも6～7年前に「1班あたりに時間をかけた、ゆとり配達をしよう」とやっていましたが、結局、供給が伴わなくなって、今は1班あたり約5分単位で配達していると思います。そうすると、「目標の数字があるのは目的を果たすためだ」と言われるけれども、「目的を持った目標」を考える時間の余裕がないんです。

組合員さんの人数を増やしても、深く話せないので、結局、スーパーに買い物に行くのと同じ感覚で生協を利用する人たちがどんどん増えて、利用高は増えない。

**【古山】** 私のところも配達のピッチがどんどんきつくなっています。そのなかで「供給促進」や「拡大」や「共済」を配達中にやる。時間の余裕がなくて、職員間の交流が難しくなってきている状況もあります。

**【二場】** 店舗の事業は収益性に問題があるので、それだけ共同購入に期待がかかって、地域担当のみなさん方が苦労しながら、しかし、とても器用にやってこられた、というのがどの生協にも共通しているところであり、おそらく実態だろうと思います。

しかし、これは非常に大きな問題ですね。たしかに1人1時間あたりの供給を上げていくという生産性も非常に大事ですが、そこを重視しながら、同時に、組合員さんにもっと豊かな情報を与えたり、組合員さんとの関係を変えることで組合員さんの需要をもっと深く掘り下げていくことを並行していかないと、単なる効率追求だけになります。



その指標はきちんと決めながら、同時に組合員さんとの関係をつくり変えていくような働きかけをしていかなければいけません。

そのためには、地域担当の人が現場でどうやるかということも大事だし、生協全体としてどういう仕組みで広く情報を伝えていくのかという、バックアップの基本も大事になるし、チーム間のコミュニケーションも必要です。その辺りを総合的に考えなければいけない時期になっていると思います。**カタログを通した情報提供**

**【二場】** 情報提供という点では、カタログに何をどう記載するかが基本となります。この点はいかがでしょうか。

**【古山】** 若い人の特徴としては、カタログの中で見るところが、食品と雑貨、というふうに決まっていて、それ以外のものは見ない。よく「カタログが多い」と言われるのは、たぶんそういう理由だと思います。

**【渡部】** 班でお会いできる方は、時間が許せばお話しできますが、家で商品を選ぶときは紙面しか情報がないですし、特に若い共働きの方は忙しくてカタログを見る暇もない。「いつも同じページに同じものを載せてほしい」とか「安いものも高いものもあるから、全部見ている暇はない」といわれことがあります。忙しい生活のなかでも、「すぐに検索できて便利」とか「カタログを見ると楽しくなる」というような紙面の工夫もいるのかなと思います。

**【古山】** カタログの内容については、「組合員さんの声」を載せることができます。安くない商品でも、カタログに「私は子どもにこう食べさせています」といった声が載っていると、若い組合員さんも「この商品気になってたんや。買ってみるわ」という反応がよくあります。

**【山本】** 私は「担当ニュース」にレシピを載せていました。私は手抜き料理しかしないし、そんなに高いものは買わないので(笑)、生協の商品を使って、安くて簡単にできるレシピばかりです。それを載せるととても喜ばれて、うちと同じくらいの年齢の子どもさんは、同じものを買って、つくって、食べて、翌週、「おいしかったです」とお手紙で感想をくださいました。これはとても感動しました。

## 月刊情報誌による情報提供

【二場】 京都生協の『コープロ』のような、各組合員向けに発行している月刊の情報誌は、どの程度きちんと読まれているでしょうか。

【山本】 40～50代から感想を言われることもありますが、具体的な反応が返ってくるのはもっと上の世代です。そういう方は情報誌をゆっくり読む時間がいますが、たぶん若い方は冊子を開かずにそのまま、というのが多い感じがします。

【古山】 私は組合員さんから『たまごくらぶ』や『ひよこくらぶ』（子育て世代向けの雑誌）でコープ商品を紹介してたよ」と言われてびっくりしたことがあります。1人目のお子さんをお持ちの方は、離乳食も何をつくればいいのかわからない状態なので、そういう雑誌をよく読まれますよね。そこで、生協が出している離乳食の「バランスキューブ」が載っている冊子をお渡しすると喜ばれます。今はインターネット上に情報があふれていますが、その情報が本当に正しいのかと考えると不安や疑問があるので、身近に感じられるものがあればいいのではないかと思います。

【渡邊】 そういう冊子はコンセプトがはっきりしていますよね。だから、子育て情報がほしい方にお渡ししたらそれには必ず目を通してくれるのではないかと思います。単に「カタログ」とか「いつもの情報誌」というだけでは、なかなか目を通してもらえないかもしれません。

## 店舗と配達の連携

【二場】 店舗と共同購入の連携という点はいかがでしょうか。京都生協といえば、お店と共同購入を両方利用している人が、一番利用高が高くて、そういう人たちの割合が全体の約3割ですから、お店のある地域では、共同購入とのタイアップがとても大事になると思うのですが。

【渡邊】 店舗がある地域への配達の際に、若い方に試食会や産地交流の情報を伝えするとしても好評です。特に白バラのケーキやシュークリームをつくっている大山乳業さんは、もともと共同購入でも人気があって、「大山乳業さんが来はりますよ」と言うと、「めっちゃ好きやし、行くわ！」という感じです。

【二場】 情報提供という点では、店舗は情報を提供しやすい条件が多いはずなので、そこを若い

人にうまくつなげることができないかなと思っています。また、京都生協のいくつかの支部で、引き売りというか、天草晩柑など限られた商品を、その場で食べてもらったら、話がとても弾んだそうです。やはり情報は工夫をしなければ伝わりにくいのでしょうか。

## ベテラン組合員からの情報提供

【二場】 それと、若い方は、年配の人と班をつくるのを嫌がる面があるかもしれません、年配の人と同じ班になった場合、年配の人の持っている情報が素直に伝わって、いい関係がつくれたらいいなとも思います。その辺の実態はどうでしょうか。

【古山】 年配の方4人と若い方2人の混合班で、子育てのアドバイスがあったりしてすごく雰囲気が良い班もあります。若い方の家が少し離れているので分班を提案したのですが、「私はこっちでいいよ。いろいろ教えてもらえるし」とおっしゃいました。



子育ての情報を伝えたり、たくさん貰われたときは「子どもは私たちが見といてあげるから」と声をかけたりして、おばあちゃんと孫みたいな感じです。見ていてとてもほのぼのするというか、「こういう班で、いいなあ」と思います。でも、他の班で、「年配の方の班にどうぞ」とおすすめするのは、なかなかできませんね（笑）。

【渡邊】 私のところは混合の班がけっこうあります。特に去年から今年にかけて、何人かの新しく越してこられた方に近くのおばあちゃんたちの班に入ってもらいました。近くに同世代の班がなかったという事情もありますが、昔からの班は、協力体制が整っているので、「いいよ、いいよ。子どもも見たるよ～」という感じで、快く受け入れてくださいました。転居してこられた若い方も、「まだご近所付き合いもないで、やってみます」ということで入ってくださって、その後もすごくいい関係です。若い方は「子どもにいいものを選んであげたい」という思いがあるので、おばあちゃんたちに「こんなんはどうですか？」と聞いて、「この商品はここここがええんや」と、私よりも熱心にすすめてくださいます。

## 若い世代に合わせた商品の提供方法

**【二場】** 若い方は特に共働きが多いという状況がありますし、おそらく今後も増えていきます。そこで、共働きの人が生協を利用しやすくする上で、変えなければいけない点はあるでしょうか。  
**無人荷受け**

**【山本】** 子どもさんが小学校に上がると共働きになる方が多いので、赤ちゃんの子育てのときに加入された組合員さんが、入学時にいったん生協をやめるケースはけっこう多い感じがします。

**【渡部】** 私の担当地域でも例えばお子さんが幼稚園に上がったときに「荷受けが難しくなるのでやめる」という人が多かったです。そういう場合、個配に移行する方もおられますか、利用が少なかつた方はやめることも多いです。

無人荷受けの班も増えていますが、昔から共同購入をされていて途中から無人荷受けになった場合はわりとスムーズに移行できることが多い反面、新たに加入した人が無人荷受けの班になる場合は、不安が大きいようです。

個別配達を利用したらしいという意見もあるかもしれません、無人荷受けでもいいからグループをつくることでコミュニケーションのきっかけにならないかなと思いながら回っています。

**【古山】** 無人班は盗難の可能性がありますし、「置いていて100%安全？」と聞かれて、何とも言えないところがあるので、そこは難しい点もあるかなと思います。

**【二場】** 無人班は、組合員間の信頼関係がないと、なかなか成立しないので、それをどうつくるのか。しかも、いまのように安全性が重視される状況のもとで、そこをどう保障するのか。そこはかなり工夫しなければいけないでしょうね。

## 地域ステーション・夜間配達

**【山本】** 小学校や中学校のお子さんをお持ちの方は、「地域ステーション」を利用している方も多いですね。「近所付き合いもそこまで深くないので、近所の人に預けたくない」というのがあって、「お店なら自分で取りに行ける」というので利用される方が多いんです。去年、甲南センターでは全部で20カ所ほど増えました。無人班になってしまったり、他の人に預けるのがイヤだということでやめられた人が、もう一度入り直

して、地域ステーションでやるケースもあります。

ただ、地域ステーションをたくさんつくると、ステーションによって「あっちはここまでやってくれているのに、ここはほったらかし」という意見が出てくる可能性もあるので、いろいろ工夫が必要になるのかなと思います。

**【渡邊】** 京都生協の地域ステーションは店舗、熱心な組合員さんのガレージ、あとは自営の商店で、その場合も組合員さんが中心です。店舗の個人引き取りの場合、お買い物帰りにカタログの商品も取りに来るので、けっこう便利に使われているのではないかと思います。でも、来店される日が空いたりすると、注文が途絶えることがあるので、配布枚数は多いのですが、実利用は約6割で、少ないと言われています。

**【古山】** 私のエリアは、班が解散した後にリーダーも総出で地域ステーションを引き受けてくれるところを探しましたが、なかなかないんですね。それで、その班が解散してからは、個配に移ったり、やめられた方もあります。

**【山本】** 「家にいる時間に持ってきてほしい」という意見は多いので、夜や早朝の配達というか、そういうニーズに合わせるのも必要なかもしれませんと思います。

**【今】** ならコーポでは、夜間配達を支所で1本という感じでやっています。配達時間の最終は7時半から8時頃です。ならコーポは、個別配送をすすめる流れになっているので、無人班は現在ある班だけという感じで、あまりすすめていません。個別配達の料金を低くして、みなさんを利用していただけるように、という方向です。

**【二場】** 個配で配達時間を延長するか、地域ステーションをうまく活用するか、あるいは勤務先の理解がある場合には職場班など、それぞれ工夫していく必要があるかもしれません。

今日の座談会では、若い世代をテーマとして、新しい発見や課題もたくさん出てきました。生協は、競争激化、IT技術の発達といった環境変化の中で、今までの仕組みを大きく見直していく時期に来ていると思います。これからも、このように、一つずつのテーマを掘り下げていく機会が重要なになってくるように思います。

## 生協で子育て層が減少し続けているのは何故か

ちかもと さとこ  
近本 聰子 ((公益財)生協総合研究所研究員)

本稿では、子育て層組合員が人数でも利用額でも少ないのでどうしてなのか、データをみながら考察してみたい。この課題は15年以上言われ続けているものだが、クリアした生協はあまり多くない。現時点でかなりクリアしているのは首都圏のパルシステムのブランド戦略ではないかと思う。全国的にみると、この課題の大きな要因は、ニーズ（特に価格志向）や意識の側面と人口動態的な側面とがあるのではないかと考えている。その両方をコンパクトに紹介したい。

### 「主婦」が買い物する機会は減少傾向？

国立社会保障人口問題研究所より5月31日に公表された「第4回全国家庭動向調査（2008年実施）」によると、夫婦の家事分担が少しずつ進んでいる様子がでていて興味深い。

調査全体の結果は、性別役割分担についての平等指向の意識は頭うちの観がある。だが、若い層では夫の家事遂行割合がかなり高まっていることが分かる。特に「日常の買い物」の夫の遂行率はどの世代も格段に上がっているが、特に妻が20代の夫たち（N=309）の買い物率は51.8%と買い物行動率で筆者の見る限りでは初めて半数を超える数値となった。週に1～2回以上を遂行率とするので、予想以上に頻繁ではないだろうか？

男性の買い物機会の増加とともに、後述するが子育て家族を支える親世代が買い物（や食事提供）を代行する機会も増加している。また、組合員層でも毎日買い物したくないという人が増加し（09年度の全国組合員意識調査）（以下09全調）、主婦が買い物をするというメインストリームそのものが崩れてきた。「主婦（お母さん）の生協」というブランドイメージが強いとすると、生協のイメージそのものに古臭い一面がでてきた。

加えて、魅力的な店やカタログ、生協商品ということを考える場合、男性も行きたくなる・買いたくなる、業態や品ぞろえを視野にいれているだろうか？男性のほうがより利便性を追求する傾向があるとしたら、そのニーズに応えられるだろうか。

### めんどうな日常の「食」をどう楽しく解決？

日本の既婚女性は「家族の健康は私が管理する」という意識が大変に強く、09全調でも8割の組合員にそのような意識がある。これは驚嘆するべきデータなのだが、国内にいると当然と感じられる。

しかし、20代独身者の食生活調査では、食事を作らない理由の上位に「めんどう」という気持ちがあり<sup>(1)</sup>、結婚した途端に突然食事作りに責任を感じてしまうことと大分乖離がある。態度や生活技術の点で移行にかなりのハードルがあるのでないかと考えられる。経済不況により独身者も“おうちごはん”率が増加したのは皮肉ともとれる。

このハードルを越えていくのが「おいしい」「作ったら意外に簡単」「家族からの誉めことば」などエンパワーがいかに多いか、ということだ。人それぞれに励みとなるものがあるのだが、生協では何をエンパワーできるだろうか？

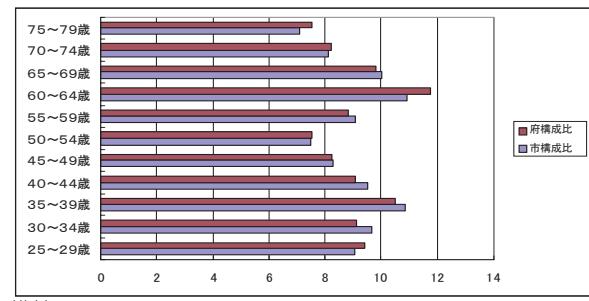
生協での食品調達が、若い組合員にとってどのように魅力を持てるのか、年長者の高度経済成長期の視点ではなく、当事者のニーズを把握する機会や、調査が必要であろう。一般的には「安い」「便利」「簡単」や「おいしい」「楽しい」などがこれまで若年層に支持されているところだ。もっと安心食材とこれらを合体できないのだろうか。人口構成比の変化に対応しているのか

構造的な側面をみてみよう。現在筆者は、東京都の生協組合員（組合員数の多い生協3つの合計）のデータを分析しているが、東京都というのはかなり特殊な人口構成である。買い物人口（女性25歳から79歳 筆者の設定）では、団塊世代よりも30代の人口のほうが多いのである。それでは、京都はどうだろうか？

京都府の2010年5月1日の推計人口では、女性人口が136万人その内56%が京都市に在住している。買い物人口でみても55%が京都市在住でありほぼ同様である。京都府面積からみて都市への集中が進行している。年齢別人口が推計値で出ているのでグラフ化すると、東京のように若年層が多くなく、全国同様に35歳未満は減少している。こ

れに加え若年層の未婚率は上昇しつづけており、世帯構成も単身・夫婦世帯が激増している。このような人口動態で、構成比の低い「若年子育て層」というパイをいかに奪うか、市場は激しい競争状況である。

#### <京都府・市年齢階層別人口構成比>

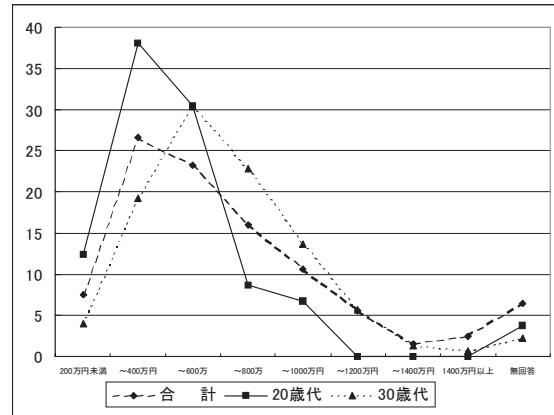


京都府・市ともに25歳以上79歳以下女性人口を分母としている  
府人口は05年国勢調査に5を足した推計人口（筆者作成）

#### 所得の低い子育て層に魅力のある生協か？

日本の家計構造は、年功賃金制度が崩れてきているとはいえ、明らかな年齢別賃金の上にのっている。全調でみると、20代組合員（N=105）と30代組合員（N=598）では分布にかなりの差があり、また50代組合員とは平均値で倍近い夫婦年収の差がある。この傾向は調査開始の94年から変わらないが、20代の組合員構成比が半分以下になり、二一

#### <20代・30代の夫婦年収分布>



合計数はN=4304 年齢無回答者含む

資料出所 09年度全国生協組合員意識調査 日本生協連

ズそのものが顕在化し難くなっている。

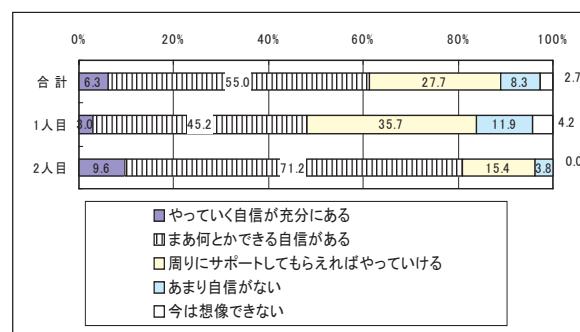
よって子育て終了世代は若年層の価格志向が非常に強いことを認識する必要がある。ただ、低所得層はターゲットにしない（協同組合的には仲間に入れない）という戦略もあり得るわけで、よく言われるように、付加価値のある高級食材だけを

扱うほうが利益は大きい。さて、低価格で安心な食品を実現できるだろうか。

#### つながり初心者

子どもをもったばかりの人たちは、くらしの初心者でもあり、地域でのつながりの初心者もある。慣れた地元で結婚出産するという人は少数派。第1子出産前のプレママたちの自信のなさが、下記のデータなどにもよく表れている。2人め出産の女性とは格段に差がある。

#### <出産前の食生活への自信>



資料出所：妊娠期を支援するウェブサイトと地域のプレママ講座開発事業 09年度事業報告 生協総研

さらに、先の人口研の調査では、夫婦どちらかの親との同居近居が6割と非常に多いというのが実態で、若年層の家族は親族ネットワークをまず活用している。また、現代社会では携帯電話などの情報ツールで簡単に空間を越えることができるのに、地元の「こわいおばさん」と繋がらなくても、友だちと仲良くできる時代だ。「生協を勧めたい人」を聞くと（全調09）、若い組合員ほど「友人」という回答が高い。ステキな先輩がいないと活動面でも長持ちしないだろう。

このような中で、個別ニーズは非常に細分化され、個人対応や個人の事情を優先した消費行動が可能なシステムが出来つつある。若年層にとってはそれが当たり前である。マスでの協同のメリットを、見えやすくしなければ、若年層には魅力はないのではないか。

#### 資料出所URL

京都府推計人口

<http://www.pref.kyoto.jp/tokei/monthly/suikeijinkou/suikitop.html>

京都市推計人口

<http://www.city.kyoto.jp/sogo/toukei/Population/Estimate/index.html>

(1) 農林中央金庫 東京近郊の20代の独身男女400人に聞く『現代の独身20代の食』その実態と意識

# グローバルに考え ローカルに行動 一力石さんのエコクッキングー

こんどう いづみ  
**近藤 泉**（「協う」編集委員、市民生活協同組合ならコーポ組合員）

経済の低調からなかなか回復の兆しが見えないまま、私たちのくらしは予想もしなかった変化に足元をすくわれようとしている。最も身近な地域社会の絆があっけないほど崩壊していくのに対して、私たちちはひとごととして無関心ではいられない。

誰であろうと生きていくためには何よりも食べることが大切だ。生協活動の大先輩である力石さちさんを訪ねて、宇治市六地蔵の「男の料理教室」におじゃました。

### 産直はじまる

1984年に京都生協と京都府漁連の産直かもめ直行便とともにBOOXが始ることになった。その産直に先がけて漁連婦人部の包丁教室が東宇治センター（生協の店舗）で行われることになった。ところが当になって都合で魚だけが届いた。「デモンストレーションしてくれる漁連の婦人部が来られなくなって、魚をさばく人がいない！」という緊急事態が発生、居合わせた力石さんが、「私、さばきましょうか！？」と思わず申し出で、包丁を握ったのがエコクッキングへ続く道の始まりだった。その後も「かもめ直行便」が売れているか気になって、買い物のたびによく見ていました。午後3時半に入荷したのに5時になってしまっている。「こんなにおいしいお魚が無駄になってしまふ。何とかしなきゃ、このままではかもめ直行便が中止になってしまう」と思って、店長に「魚の調理を私に教えてください。」と頼んでみた。

50本の包丁を自費で購入して、店で魚を買って2階の集会室でさばき方や料理方法を若い組合員に教えはじめた。

力石さんも4歳の子を育てる若いお母さんだった。日記を見ると子どもが4歳から20歳になるまで1000回ほど「魚のおろし方と持ち味を生かした食べ方の工夫」の教室を実施しているという。会場は50人の若い組合員でいっぱいになった。赤ちゃんをおんぶしたり、小さい子を別室で遊ばせながらイワシの手開きやアジのたたきをつくった。

京都府漁連の人が「平等院近くの生協の店に入ると、上から包丁のトントンという音が聞こえてきて胸が熱くなった。」と当時をふりかえる一文

を漁連誌に残している。

生協の店につきものの集会室が本来「地域の拠点」として産地と生活者のつながりに役立ってきたのだと感心する。

### 食べものへの思い

何が力石さんを動かしたのだろうか？ 力石さんのふるさとは青森県十和田湖の近くだ。母方のおじいちゃんの家が下北半島にあって、よく遊びに行った。引き潮になると海岸から30m先の島まで潮が引いていたので、イワシを手づかみで採って「もんぺ」に入っていたら、潮が満ちて戻れなくなり、おじいちゃんが舟で迎えにきてくれた。夏休みの思い出だ。「青森は名前の通りに白神山のような落葉樹の原生林が多く、青い森が美しいんです」。青い森は豊かな恵みの森だ。

青森市にある有名な三内丸山の縄文遺跡では、今から5000年前にゴミを分別して捨てていたことがわかっているそうだ。「自然からタダでもらうと、いなかの人は何でも大切にするんです。」あしたまたとりにいけるように森や川や海の季節の循環を全体的によく観察して、生き物の関わり合いを自分もその中に含めて理解しようとする。

だから力石さんは素材のすべてを観察し生態を知り、その生命を活かして食べる工夫を教えている。たとえば鮭やイカの雌雄を手に取って観察させる。鮭の腹をあけると、イクラやシラコが出てきて生命の循環を実感できる。あるとき下北半島から送られてきたテングサを高校生たちに見せたら、「これ山にあるの？」と聞かれた。もう親の世代から食材のもとの姿やどこで生きているのかがわからなくなっている。調理に使う水も、水道

水とフランスの硬水と御香宮（京都伏見の名水）を飲んでもらって、地球の水問題にも関心を持たせるように働きかけている。

力石さんのお話を聞いていると、動物や植物をとて食べることで私たちの血や肉がつくられている循環を意識する。食べることを軽視し、忘れてしまっていることを改めて喚起する。「助けてもらって生きている。生きもののつながりのなかで生かされている」と気づくことができる。

### 環境を思いつつ

「漁連との産直を始めたら、漁師さんたちは一尾のイワシをとるにも、いのちがけで海に出ているのだから、何とか売らなきゃ！魚が売れないと漁師の跡継ぎがいなくなってしまう」と力石さんは家にいるより生協にいる時間の方が長い日々を送った。

たくさんのアジやイワシを手開きしていると、その中に背・尾の骨が変形しているものがあることに気づき、ダイオキシンの汚染に関心を持った。ちょうど京都でCOP3の会議がおこなわれ、地球規模の環境汚染が止まらないことを学ぶ。車の運転をやめ「水を汚さない、なるべく生ゴミを出さないような生活は、主婦（生活者）の立場からしかわからない。」と思うにいたった。

COP3京都議定書を機に京都市藤の森にできた「京エコロジーセンター」に通って、「食の循環ワーキンググループ」の一員として、3年余り研究する。「捨てる物を食べる人や」と言われたが、捨てるものからでもおいしくて、また作りたくなるようなエコクッキングを京都から発信しよう、と思った。

自治体としては「食の循環」を事業化したい方針だったが、持続して採算をとれる方策に行き詰ってしまった。いろいろと考えてやってみたけれど、「環境はひとりからだ。これからは自分の道を行こう」と決意して、ワーキンググループを解散した。

現在は魚塾主宰、「京エコロジーセンター」エコクッキング講師として、宇治市福祉サービス公社やイトーヨーカドー六地蔵店の料理教室を拠点に市民に食の循環を教えている。力石さんの原点は「生きるために」だ。だから対象者は多様であ

る。ある府立高校の校長は「災害時に食糧が足りなくなったら、宇治川の魚をとって食べなきゃならんかも知れませんね。魚の開き方や三枚おろしにできれば、焼いたり、刺身もつくれるでしょう」と一年生の家庭科を力石さんにゆだねた。

一方、2007年問題といわれた団塊の世代が、リタイヤして「男の料理教室」がすぐに定員いっぱいになった。行政がクラブ化を提案して「おやじクラブ」が生まれた。現在15名である。かつての企業戦士たちは同じ教室に通って顔をあわせているのに、なかなか意思疎通ができなかったが、4年めを迎えた今はとても楽しそうに通ってくる。

### ひとりでも

私が取材に伺ったのは、4年を経たその「おやじクラブ」である。かつて「生活者」や「市民活動」とかから最も遠かった集団だ。

力石さんの対機説法ぶりを実際に目のあたりにして、一人ひとりとしっかり意志のやりとりをしていることに感動した。一方的な講義はほとんどない。各自自由に質問を発し、全員が共有する。互いに支え合い、ゆずり合いながら思いやりにあふれた調理作業がすすめられていく。素材は持ち味を引き出されておいしそうに姿をかえていく。

おやじクラブのみなさんは、ときには包丁をのこぎりに持ちかえて、春は筍を掘り、晚秋には山城の木津川河川敷の竹林整備に行き、今年からは天王山の竹林にもかかわっている。環境や地産地消に关心が高いそうだ。

力石さんの「なんとかしなきゃ」という思いが行動になり、周囲に働きかけ続けて、こんなにすばらしいなかまの絆を創出した。食や生命の循環に目覚め、地域に立脚して自発的に活動する人々こそかけがえのないセーフティネットではないだろうか。



### コープが創る子育て支援力 —コープしがの「子育てひろば」から—

かたがみ としき  
**片上 敏喜**（京都府立大学大学院 生命環境科学研究科 共同研究員）



#### コープしがの「子育てひろば」について

コープしがでは、組合員が関心あるテーマの活動を自発的に企画立案し、組合員による自主的な取り組みができる「実行委員会」という活動が多数開かれている。こうした実行委員会活動の中で南草津センターを中心に子育ての行事に取り組む「子育てひろば」と呼ばれる実行委員会がある。子育てひろばは、「子どもたちと一緒にたくさん笑って、ママも一緒に楽しんでもらうひろば」として、2004年からスタートした。参加する組合員は、20代から30代の子育て世代が中心で、0歳から3歳児くらいまでの赤ちゃんを連れて参加し、子どもたちはもとより、お母さん同士の交流も盛んに行われている。

このようにコープしがにおいて子育てひろばがスタートした背景には、委員会発足当時のコープしが南草津センター長（以下、センター長）の「子育て支援をする場所をつくりたい、お母さんがほっとする場所を作りたい」という思いが大きかったという。さらにこうしたセンター長の思いを受け止め、実行委員会として立ち上げができる力量と実行できるアイディアをもった組合員の存在が大きかった。こうしたセンター長と組合員との問題意識を共有していったことが、コープしがで子育てひろばを開催するに至る重要なプロセスとなった。

またセンター長と共に子育てひろばをはじめた組合員自身も、子育ての経験から子育て中にお母さんが抱える様々な悩みについて高い問題意識をもっており、なつかつ、保育士の免許をもっていたことも重なって、生協の重要な役割の一つである「子育て支援」をスムーズに行いやさしい状況が創られ、子育てひろばの運営がスタートすることになる。

#### 子育てひろばの人気と子育てひろばを運営する実行委員

こうしてスタートしたコープしがの子育てひろばは、2004年から今日までの6年間、年度初めの4月と夏休みの8月とを除くすべての月で開催されている。開催時間はおおよそ午前10時から午前11時半までの1時間半の時間帯で、子育てひろばに来てくれる子どもたちには様々な遊びを企画するとともに、お母さん同士の交流やちょっとしたお茶会も開かれている。子育てひろばは、年々、参加人数が多くなり、あまりの人気で抽選になるほどの盛況ぶりである。こうした盛況ぶりを支えているのが、子育てひろばの運営を自主的に行っているコープしがの組合員による実行委員会の活動だ。

子育てひろばの実行委員として活動する組合員は、共同購入、個人配達時に配られる「子育てひろば実行委員募集」のチラシをみて参加してきた30代から40代を中心とする組合員だ。実行委員の仕事は、子育てひろばに来るお母さん方と子どもたちが楽しめる遊びを考えたり、絵本の読み聞かせやお菓子、お茶の準備等を行う。実行委員としての活動期間は1年間であり、年度初めの4月に集まって会議を行い、以後は子育てひろば終了後に、次回の子育てひろば開催にむけて、企画立案や実施要項、反省点などについて話し合う。

子育てひろばは、当初、1人の組合員からスタートしたが、月日を重ねるごとに実行委員、参加者ともに増えてきて、実行委員は約10名前後となり、参加者は一番多い時期で200人ほどになったという。南草津センターから始まった子育てひろばは、現在、大津、草津、守山と滋賀県内の3つの地域で行われるようになっている。

## 子育てひろばの参加者と滋賀県がもつ地域性

このように若い世代の組合員の参加規模が大きい背景には、実行委員の精力的かつアイディアに富んだ活動に加えて、滋賀県がもつ地域性ともかかわりがあるといえる。滋賀県は全国でも人口増加率が極めて高い県のひとつであり、県外から移り住んでくる人々が多い地域である。筆者がcopeしがの子育てひろばを取材したとき、参加した組合員に出身県を聞いたところ、ほとんどが滋賀県外であったことからも分かるであろう。このため、滋賀県に移住してきた若い世代の組合員は、地縁関係が薄く、子育てをしている時期は特に、家の中に閉じこもってしまいがちになる。こうした組合員の日常生活における不安が「子育てひろば」の企画と合致し、多くの参加者につながっていると考えられる。

また、参加者である組合員の方々の多くは、日ごろ、個人配達で生協を利用している組合員が多いというのも特徴的である。加えて、子育てひろばに参加する組合員は、幼稚園入園前のお子さんと0歳から2歳児くらいまでの子さんを持っている場合が多く、幼稚園入園前の活発なお子さんの遊べる場として、また、同じ頃のお子さんをもつお母さん同士のコミュニケーションがとれる貴重な場所として、より子育てひろばの必要性を高めているといえる。

## copeしががつくる子育てひろば

copeしがにおける子育てひろばは、copeしがの子育て世代の組合員の受け皿として非常に重要な役割を果たしている。この背景には、滋賀県がもつ地域特性も大きいが、それ以上に子育てひろばを運営する実行委員の存在と創造性が欠かせない。子育てひろばを運営する実行委員は、子育



てひろばへの参加募集と同様に、共同購入、個人配達時に「子育てひろば実行委員募集」のチラシが組合員に配られ、そのチラシをみた組合員自身自発的に参加を申し込むというのがほとんどである。

実行委員として参加する組合員は、以前、子育てひろばに通っていたので今度は実行委員として恩返しという形で、経験を活かしながら関わっているという方はもちろんのこと、幼稚園の先生や保育士の経験を活かしてなんとか子育てをしているお母さん方の力になんとかなりたいという極めて献身的な思いをもって参加する方、さらに生協をはじめて間もない組合員さんなど様々な背景をもっている。

copeしがにおける子育てひろばは、こうした組合員の積極的かつ主体的な活動に滋賀県がもつ地域特性を加味された上で、copeしがが受け皿となる場所を作り上げていることによって、若い世代の組合員の積極的な参加へつながる輝きを見せているのである。

※本稿は、2010年5月25日にcopeしが南草津センターで行われた「子育てひろば」での取材を通じて執筆させて頂きました。子育てひろばの実行委員の方々、参加者の方々に貴重なお時間を取って頂き、多大なご協力を頂きましたことを紙面を借りて御礼申し上げます。

**子育てひろば 実行委員募集**

◎主催団体はcopeしが  
2010年5月25日㈯ 開催地  
第3会場(草津市・栗東市・守山市・野洲市)  
◎200年度、県民マリオットカードに掲載してきました  
「子育てひろば」の活動を大好評、野洲市でも広げていきたいと思っております

**一緒にしてくださる実行委員を募集します**

子育てひろばに来てくださるママと子どもたち  
が楽しめる遊びを考えたり、絵本の読み聞かせ  
や、お手本やお茶の準備、ママの話し相手など、  
難しいことは何もないかもしれません。専門知識も結構  
もないかもしれません！子育て中のママも大歓迎♪

一緒に楽しい「ひろば」をつくりませんか？

活動期間：2010年4月～2011年3月まで

「火曜日ひろば」と木曜日ひろばはそれぞれ月1回開催の予定。  
どちらかの曜日に所属して活動します。

活動時間：9時半～11時～13時ごろまで

\* 生協から1日につき1,000円までの活動費と、交通費支給が支給されます。

お問い合わせ：copeしが 西地区事務局 ながらままで  
TEL：0120-861-952 FAX：0120-139-502

《子育てひろば実行委員 申し込み》 西地区事務局行き

コース\_\_\_\_\_ グループ名\_\_\_\_\_

お名前\_\_\_\_\_ TEL\_\_\_\_\_

※4月21日の会議への出席(いざれかに〇をしてください) できます・できません  
†いざれにしても事務局より連絡致します

4/9(金)〆切

記述時に担当にお渡し頂くか、事務局へFAXにてお申し込みください。

※本申込書に記入された個人情報は、子育てひろばの目的以外では使用いたしません。

宮本 太郎 著  
**『生活保障 排除しない社会へ』**

藤原 壮介 立命館大学名誉教授

### 今なぜ「生活保障」か

「貧困」「格差」が、いま日本の国民生活を表すキーワードとして登場している。加えて「派遣切り」「派遣村」、そしてホームレス多発の現実を思えば、新しい政治は日本国憲法が示す国民の生活の権利を、施策の中軸に骨太に掲げて欲しいという感は一段と強くなる。

「生活保障」は「社会設計の根本にかかる言葉」「社会のグランドデザインが改められるときに必要な視点」と、本書冒頭は表題に関わって趣旨を明らかにしている。

著者は、近年「脱貧困」「セキュリティの構造転換」等をテーマに政治への発言を強めている比較政治・福祉政策論研究者である。

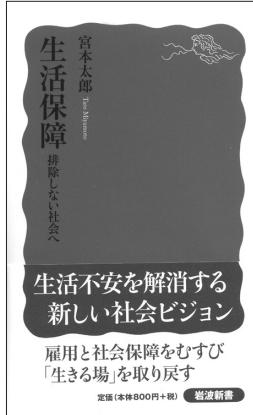
### 現代の「生活保障」

生活保障上の課題は、国により時代によって変化する。本書は、現代社会がベーシックな生活保障システムとする雇用と社会保障をテーマに扱う。その際二つを別々に取り扱うのではなくあくまでも相互の関連の中で、「生きる場」の保障として考える。だから制度論ではない。関心は国民の生活過程が生存保障とともに、自由や相互の絆を含めてどう保障されていくかにある。そこには国の責任だけでなく国民の主体性、社会形成力が重大な要件として含まれている。

### 「現代世界」の困難

「生活の保障」は第2次世界大戦後の世界では、広く自由と人権

の土台として認められてきた。しかし経済危機の中で、北欧福祉国家を含めてその現実は困難に揺れている。危機にともなう雇用不安があり、対応する社会保障も財政的な壁に直面せざるを得ない。著者はスウェーデンの経験を軸に、困難な状況と、なお雇用維持を目指す改革の努力、さらに苦渋を詳しく紹介している。明快で可能な解決策を容易に見出せる状況ではないが、これまで培ってきた民主主義に即して、雇用の維持・創出そして生活保障のあり方を論議し、経験を重ねている過程は参考にする



(岩波書店、2009年11月、800円+税)

べきだろう。

### 日本の場合

経済変動による生活の破壊は日本で特に激しく現れた。その実情は「分断社会」「連帯の困難」「個人化」として描き出されている。本書は日本のこれまでの生活保障が男性稼ぎ主の雇用を中心に階層的分断的に構成されて、しかも社会保障が弱く、所得も家事労働も主婦の典型的なライフサイクルによって補われるという仕組みであり、その解体が「生きる場」の喪

失をもたらしたという。

しかし「労働者派遣」の全面化にみるように、「構造改革」の下にそれが雇用を拡大すると主張されて、労働上の権利の保障もリスクへの考慮もなく実施された政治状況、総じて労働者の生活と権利にかかわる戦後民主主義の制度・政策は空洞化され、権利の保障を市場の負担として投げやってきた新自由主義の政策、それを主導した蓄積方式の問題は、震んでいることは残念である。

### これからの生活保障

戦後福祉政策の歴史的経験を踏まえて、これからの生活保障はベーシックインカムとアクティベーションの二類型を通して論じられる。前者のプラスの役割を認めつつ、その限界と手法に伴う危険性を指摘して、雇用と社会保障をこれまで以上に密接に連携させたアクティベーション社会を主張する。

具体的には市場参入の壁を4つの領域から考察し、労働条件を含む労働の権利を保障した上に壁を解消して、出入り自由な「交差点型社会」の形成を提唱する。

「参加」に通ずる4つの道、I 労働への参加支援、II 働く見返りの強化、III 持続的雇用の創出、IV 時短と一時休職制、を詳しく紹介する余裕はないが、「働くため」の生活保障に限定され、しかも提案には労働と分配の公正が前提とされている。

斬新な提案内容も現実には、蓄積様式の根幹に触れて戦後日本の民主主義を「前進」させることなしに、生活保障充実の形として機能するか否かは疑問が残る。

社会のグランドデザインを決定する岐路に立つ現在、充分に参考にし考えてみるべき一冊だろう。

(ふじわら そうすけ)

ベン・コーエン/マル・ワーウィック著 斎藤楨/赤羽誠訳  
**『ソーシャルビジネス入門』**

加賀美 太記 京都大学大学院経済学研究科博士後期課程、「協う」編集委員

地球環境問題や貧困・格差問題など、私たちの身の回りには、解決に向けて社会全体で取り組まなければならぬ課題がいくつも存在する。そんな中で、いま、ソーシャルビジネスという概念に注目が集まっている。

ソーシャルビジネスとは、ビジネスという手法を通じて、前述のような社会的課題を解決しようとする活動である。無償を基本とするボランティア活動とは異なり、社会的課題の解決へのアプローチをビジネスとして成立させようとする点が特徴とされている。

本書は、ソーシャルビジネスの先駆けとして知られる米大手アイスクリームチェーンのベン&ジェリーズの設立者であるベン・コーエンによる入門書である。ベン・コーエン自身がソーシャルビジネスをおこなう企業を立ち上げる「社会的起業」を支援していることもあり、本書はソーシャルビジネスに取り組もうとする経営者、あるいは起業家向けの啓蒙書という性格が強い。とはいっても、ソーシャルビジネスに関わる論点や考え方が網羅されており、ソーシャルビジネスに関心のある人にとって示唆に富む内容となっている。

まず、著者は、ソーシャルビジネスには5つの側面があると述べている。すなわち、「従業員」「仕入先」「顧客」「コミュニティ」「環境」の5つである。これらの「ステークホルダー（利害関係者）」に、ビジネスの主体である「会社」

を加えた6つの視点から、本書はソーシャルビジネスの考え方を説いていく。

出発点となるのは、ソーシャルビジネスをおこなう会社の「価値観」である。著者は、より良い社会を作るという価値観にもとづく経営こそがソーシャルビジネスの核心であるとした上で、それを実現する意義と困難を明らかにしている。

次いで、それらの価値観を実現していくために「従業員」とどのような関係を築いていくべきかが



(日経BP社、2009年7月、1600円+税)

論じられている。従業員の生活賃金補償や福利厚生といった制度設計だけではなく、何よりも理想とする価値観を共有するための関係作りが大切であると強調されている。

この価値観の共有は、「仕入先」「顧客」との関係についても同様である。大口の顧客であっても、自社の価値観にそぐわないのであれば取引をやめる。仕入先が古くからの馴染みであっても、社会的責任に無頓着であれば取引をやめるといった具合である。自らの価

値観を相手に理解してもらうための努力は必要である。しかし、ビジネスの一環である取引を通じて、社会的課題への取り組みを仕入先や顧客に働きかける有効性を、著者は積極的に評価している。

「コミュニティ」については、進出地域へ溶け込む努力の重要性をあげている。また、地域社会への貢献を謳いながら、それを寄付で済ませることには疑問を投げかけている。事業という活動によって継続的に社会的課題に対して取り組むことを、著者が重視しているからである。

最後に、「環境」への配慮を欠かしてはならないとしている。地球環境への考慮は、利益の面から見ればプラスにもマイナスにもなりうる。しかし、ビジネス全体が環境に及ぼす影響は個人生活のそれよりもはるかに大きい。だからこそ、事業者が真剣に考えなければならないと著者は主張する。

本書では、全体を通じてソーシャルビジネスに取り組む企業の事例が数多く紹介されており、その実態がじつに多岐に渡っていることがわかる。製造業もあれば小売業もある。規模も大小様々である。企業の社会的責任が問われる一方で、そんなことが考えられるのは、あるいは考えるべきなのは大企業だけだという声や、消費者向けのパフォーマンスでしかないという声もある。それでも、深刻化しつつある社会的な諸課題に企業がどのように向き合うかは、今後ますます重要になってくると考えられる。本書は、その一つの在り方を考えるきっかけとなるだろう。

(かがみ たいき)

第20回 上掛利博さん 京都府立大学 公共政策学部 教授  
当研究所理事・研究委員代表

## 福祉社会を創るために —「運動」と「普遍主義の福祉」の両面から考える—

聞き手：長壁 猛（「協う」編集委員・事務局）



### ❶ 研究者になろうと思ったきっかけは？

大学に進みたいと思ったのは、高校の時、自由な発想で教えてくれる社会の先生がおられ「自分もそんな先生になりたい」と憧れたからで、1浪して1974年に京都府立大学の文学部社会福祉学科に入学しました。当時の京都府大は、国立1期校と2期校の中間に入試がある「1.5期校」で、全国から多様な学生が集まっていました。4回生の時には教育実習にも行きましたし、研究者になろうとか「なれる」とは考えていませんでした。

大学では合唱団に入りましたが、クラブの先輩が『資本論』の読書会をやっていて、73年に府大の女子短大部に生活経済科ができ赴任された小野秀生先生がチューターでした。4年間で『資本論』を3回読みました。そのころ、京都大学の池上惇先生たちが経済学基礎理論研究所をスタートさせて「人間発達の経済学」という理論を提起しました。それがとても魅力的で、「経済学というのは、こういうことを勉強するのだ」と知ることができたのが大きかったと思います。福祉の分野でも、京大の教育学部の田中昌人先生が「発達保障」ということを言われ、ちょうど経済学の「人間発達」と重なって、勉強していく非常におもしろかったです。

加えて、3回生の福祉実習で与謝の海養護学校の寄宿舎に行った経験も大きかったです。1回生の時に、青木嗣夫『僕、学校へ行くんやで』（鳩の森書房、1972年）という本を読んで、与謝海での養護学校づくり運動のプロセス（民主的な地域づくり）を知り、「実習に行くのならここだ」と思って、府大的学生として初めて実習に行きました。また、近江学園を始めた糸賀一雄さんの『福祉の思想』（NHKブックス、1967年）を読んで、「この子らに世の光を」という旧来の福祉ではなく、「この子らを世の光に」という福祉思想の転換について学んだことも大きな衝撃を受けました。

4回生の時、社会福祉の歴史が専門の池田敬正

先生が府立大学に着任され、1期生としてゼミで指導を受けました。池田先生は、「社会福祉は総合科学なので、何か基礎科学が必要だ」という考えでしたので、私は経済学を基礎に置いて福祉のことを研究したいと考えて、卒業論文では、当時大きな影響力を持っていた孝橋正一さんの「社会事業論＝社会福祉政策論」の批判的検討を行いました。この卒論が、その後の研究の出発点となりました。孝橋理論は、古い資本主義理解による「窮乏化の経済学」をベースにして社会福祉の問題を位置づけていたので、私は「人間発達の経済学で社会福祉の問題を考えるなら、別な展望が可能になる」というような枠組で書きあげました（学生の卒論でしたけれど、池田先生は著書の中で紹介して励ましてくださいました）。

### ❷ 大学院ではどのような研究を？

文学部の卒業でしたし、経済学の大学院へ進むのに2年間浪人をしました。岡山大学の経済学研究科には、社会政策の向井喜典先生はじめ、経済学史の八木紀一郎先生、財政の坂本忠治先生、経済原論の高木彰先生、日本経済の下野克巳先生、労働経済の野村正實先生など多彩な先生がおられ、ほとんどマンツーマンで2年間みっちり教わりました。また、JSA（日本科学者会議）の活動では、歴史学の吉田晶先生はじめ、政治学や法律学、農学、教育学等の先生方からも学びました。

修士1回のときに、東京大学の中西洋さんの大著『日本における「社会政策」「労働問題」研究～資本主義国家と労資関係』（東京大学出版会、1979年）についての書評論文を、向井先生と共に書いたのが活字になった最初です。修士論文は、イギリス救貧法をテーマにしました。関西学院大学の大前朔朗先生からお借りできた原資料（18世紀末に貧民の科学的な管理を考えていたT.ギルバートの救貧法改革法案）をとりあげて、「貧民の院

外救済を認めたスピーナムランド制度をつくったギルバートは、ワークハウスの外での救済をやって救貧費を膨大にした」という通説は間違っていることを明らかにしました。また、岡山で学んでいた時、重度障害者を多数雇う「吉備松下」という松下電器の子会社の福祉工場ができたので、立命の三好正巳先生から調べるようアドバイスを受けて調査に出かけました。

岡山大学は修士課程までしかなかったので、立命館大学の経済学研究科博士課程に編入学させていただきました。指導教授は塩田庄兵衛先生で、戸木田嘉久先生と三好先生が副指導担当につくという「豪華な」指導体制でした。立命では、戸木田ゼミを中心に戦争問題・社会政策の院生が集まっており、経営学研究科の院生も一緒になって毎日のように議論をやりましたし、人文科学研究所の「戦争問題研究会」には、坂寄俊雄、藤原壮介、浪江巖などの先生方や、伍賀一道（金沢大）、三富紀敬（静岡大）、湯浅良雄（愛媛大）など先輩たちも出席され、活発な研究活動が行われていました。

#### ❶ 研究テーマについて聞かせください。

今までやってきたことは、6つぐらいの分野になります。

第1は、イギリスの救貧法です。福祉の思想に関するもので、ギルバートやアダム・スミスについて書きました（「T.ギルバートの救貧法改革論（1781年）について」『立命館経済学』第35巻3号、「アダム・スミスと生活経済思想」小野秀生編『生活経済思想の系譜』青木書店、1996年）。岡山大で八木先生に2年間、スミス『国富論』、J.S.ミル『経済学原理』、A.マーシャルの『経済学原理』などの講読をしていただき、経済思想がとてもおもしろいと思いましたので、福祉の思想について関心を持ってきました。

第2は、障害者雇用です。塩田先生の退職記念論文集に書いた「障害者共同作業所づくり運動と福祉政策」（『立命館経済学』第35巻4号）は、名古屋の「ゆたか福祉会」などの聞き取り調査を行ってまとめました。また、「吉備松下」について書いた論文（「巨大企業の障害者雇用と『福祉』」三好正巳編『現代日本の労働政策』青木書店、1985年）は短いのですが、三好先生から「あなたが

書いたなかで一番いい」と言っていただきました。当時の福祉政策の転換の意味内容を分析できたからだと思います。

第2は、福祉理論に関してで、1989年から7年間、井上吉朗さんや京都生協、運動団体の人たちと一緒に「社会福祉講座」をやりました。このうち最初の5年間は出版されました（『福祉を創る』『老人福祉を創る』『地域福祉を創る』『障害者の未来を創る』『福祉都市を創る』かもがわ出版）。このシリーズのなかで、「創る福祉」（自分たちで福祉を創造する）という考え方を提起しました。また、府立大に新しく福祉社会学部が発足するとき出版した『福祉社会を築く』（富士田邦彦編、文理閣、2000年）のなかで、「普遍主義の福祉」が「人間の自由」につながるという着眼点から「ノーマライゼーションとヒューマニゼーション」というタイトルの論文を書きました。

第4は、男女平等に関するものです。「社会保障とジェンダー・エクイティ」（『女性労働研究』第30号、1996年）は、当時のフェミニズムのなかに「個人単位化が良くて、家族はだめだ」という議論が流布していたので、「家族を社会の基本に置いて、女性も男性も人間らしい暮しができるような政策展開が求められている」ことを、95年の北京女性会議の行動綱領を読み解いて書きました。また、上野勝代先生が代表で、2004年にカナダとアメリカのDV（ドメスティック・バイオレンス）の調査に行き、その後も韓国、台湾の調査などに出かけました。

第5は、北欧ノルウェーの研究です。共編著の『世界の社会福祉⑥デンマーク・ノルウェー』（旬報社、1999年）は、ノルウェーの福祉に関して日本で初めてまとめた文献です。ノルウェーの福祉を研究している人が日本にはほとんどいなかつたので、ノルウェー人の研究者9人に協力してもらいました。1994年に、家族と一緒に南ノルウェーの小さな町で暮らして在外研究をした成果です。ノルウェーは1970年代に「福祉社会」となりましたが、土台には、①短い労働時間と長い自由時間、②広い住宅と豊かな自然環境、③男女平等と民主主義、④一人ひとりの能力を開花させる「学習社会」があって、これを支えています。帰国してから始めた府民向けの講座「京都ノルウェーゼミ」

は17年目に入りました。

第6は、生協の福祉に関するものです。「非営利組織の福祉活動と規制緩和」（戸木田嘉久・三好正巳編『規制緩和と労働・生活』法律文化社、1997年）は、一番ヶ瀬康子さんに、「非営利組織の福祉創造活動の重要性についての的確な指摘」と評価されました（『講座・戦後福祉の総括と21世紀への展望Ⅰ』ドメス出版、1999年）。他に、「高齢化の現状と生協福祉の課題～セーフティ・ネットの福祉を超えて」（『生活協同組合研究』2007年4月）などがあります。

## ④社会福祉のビジョンとは？

「吉備松下」など、現場の調査を踏まえて研究するスタイルは、九州の炭鉱調査をされてこられた戸木田先生など立命の労働問題研究で教わりました。社会福祉の理論面では、学生時代に学んだのは一番ヶ瀬さんと立命館の真田是先生の「社会福祉運動論」ですし、障害者の共同作業所作り運動からです。

こうした実態調査や運動を踏まえて福祉の研究をやってきましたが、ノルウェーで在外研究をしてみて、「男女平等と民主主義がないと福祉社会は実現できない」と思いました。福祉というのは、特定の人だけを対象とするのではなく、誰もが自由に暮らせるようにすることです。普通の人々の「日常の暮らしの質」が高い状態を、障害があってもなくても、高齢者も子どもも、女性にも男性にも確保する。みんなが「自分の持っている能力」を生かして「自由に生きる」ことができる、そういう「普遍主義の福祉」をノルウェーで実際に体験しました。

私は、福祉というのは広い意味で捉えて「人間の幸福」のことだと考えていますが、大学時代の恩師の池田敬正先生の福祉の考え方（『福祉原論を考える』高蔵出版、2005年）を読んで確信しました。池田先生は、「卒業論文で書いたことは生涯にわたって影響を持つ」と言っておられました。

社会福祉は、問題に一番気づきやすい場所にいる障害者や高齢者や子どもたちが気づいた問題を、みんなが幸せになるような方法で解決するところに「ソーシャルワーク」（社会福祉の仕事）としての存在理由があります。社会福祉の問題というのは、目の前の問題の解決を通じて社会全体を良くしていく、法律や制度を整備して人々の意識を変え、誰もが安

心して幸せに暮らすことができるような社会をつくることなのだと思います。人間の発達は、そうした福祉運動や民主主義運動と結びついていることを忘れてはならないと思います。

## ⑤日本のことを考える際、北欧研究はどのような意味が？

なぜノルウェーだったのかというと、1993年にくらしと協同の研究所から吉野正治先生を団長に北欧の福祉の調査に2週間行きました。私にとっては初めての海外でした。スウェーデンはとてもモダンで都会的な人が多かったのに対して、ノルウェーはシャイで田舎っぽい人が多くて、とても日本人に近い感性を感じました。研究上でも、スウェーデンにはすでに多くの研究者が出かけており、スウェーデンやデンマークを通じて北欧の福祉を紹介する本はたくさん出していましたが、ノルウェーについては情報もほとんどありませんでした。それで「在外研究に行くのなら、人間性が合って研究もまだされていないノルウェーへ」ということから、ノルウェーを選びました。

かつて日本では、「福祉亡國論」が唱えられて「福祉を充実させると人間が怠け者になる」と吹聴されました。「福祉墮民觀」に立って、福祉は怠け者をつくるが競争は活力をうむ、「競争が必要だ」という考え方方がマスコミを通じて国民に流し込まれました。学校教育でも、北欧諸国は中学までの教育では教えられていません。同じ資本主義でも「北欧型の資本主義」があることについて、日本では知らされていないのです。

日本は、小泉・竹中改革が典型であったように、「アメリカこそ自分たちのめざすもの」ということで、アメリカの競争社会が理想とされてきました。しかし、世界には別の考え方があることを踏まえて、ヨーロッパにあってEUに加盟せず、経営トップの4割を女性にするなど、独自のポリシーを持っているノルウェーという国のあり方やノルウェー人の哲学から学ぶことが多いのではないかと考えています。

## ⑥協同組合への関心はどのようなことから？

理事長の的場信樹さんが府立大学に非常勤に来られていて、『転換期の生活協同組合』（野村秀和ほか編、大月書店、1986年）を贈呈されたことが

始まりです。

協同組合とのかかわりでは、90年代始めに日生協の女性評議会のメンバーだった末川千穂子さん（京都）、谷美代子さん（大阪パル）、仲宗根迪子さん（奈良）、立川百恵さん（愛媛）が、「生協内の女性の地位向上と男女平等」について講師に招いてくださいり、研究会などでも学ばせていただきました。ですから、生協との関心の出発点は「男女平等問題」です。

次が、吉野先生と出かけた「北欧福祉調査」で、北欧のくらしや文化にふれたことです（このコーディネートも、的場さんが担当されました）。

その後、研究所の運営にも参加するようになって、井上英之先生の後を継いで『協う』の2代目の編集長になりました。当時の『協う』は毎月発行でしたし、井上先生は非常に広い問題関心や情報をお持ちですので、『協う』編集部で学んだことが、生協との関わりの3番めになります。

4番めは「生協と福祉研究会」です。この研究会は、川口清史前理事長が代表で、的場さんが事務局をやっておられました。その研究会で、「古い福祉の考え方と、川口さんや的場さんのような多様な視点から見る場合ではずいぶん違う」ということを確信しました。さまざまな人々との議論も刺激的でした。

5番めは、研究所がおこなった大がかりな委託調査として姫路医療生協（網干地域の主査）や庄内・鶴岡への調査ツアー、おおさかパルコープやコープしがの福祉政策づくり、各地の市民生協、福祉クラブ生協、労金、JAなどの協同組合関係の講演にも呼んでいただき、協同組合への関心を広げてきました。

6番めに、京都生協の理事を10年、京都府立医科大学・府立大学生協の理事長・副理事長を4年やらせていただき、実際に協同組合の運営等について考えさせられましたし、大学生協の全国大会や京滋奈良の他生協との交流などで学ぶ機会も多くありました。

以上のようなことで協同組合とつながりました。

#### 今後の研究活動については？

3つくらい関心があります。

ひとつは、ノルウェーの人の暮らしの質の高さの背

景にある哲学というものを知りたいと思います。ノルウェーの場合、「大自然のなかに人間が存在していて、自然と向き合うなかで自分で考える」という側面があるので、自然環境の問題、自然と人間のつながり、人間と人間のつながりなど、その土地に根ざした人間形成のされ方から学ぶこともあるのではということを調べてみたいと思っています。

2つめに、福祉の理論について「広い福祉」という点から整理して、「人間の幸せとしての福祉論」を構築したいとい思います。「人間発達の福祉」をベースに、「人間の幸せの福祉をどう創るか」ということです。福祉分野の専門研究は、視野が少し狭くなってきていて、それでは「社会」を問わない個別の相談・支援になってしまって、おもしろくないと考えるからです。

3つめは、研究というより問題関心として、大学は学生を育てるところに大事な役割があって、大学にしかできないことだと思います。自分の子どもに対しては、言いにくいことや、たとえ言ったとしてもきいてくれないことがあるけれど、大学で学生に対しては、言って伝えたいこと、あるいは言えばきいてくれるという側面があります。「他人だから言えること」があるのではないかでしょうか。そういう意味で、学生の人たちの人間的成长に（他人であり、先輩である）教員がどのように関わることができるのかという点を考えてみたいと思います。私自身が、いろいろな先生たち（本・映像も含む）との「出会い」から影響を受けて自分自身を変化させてきたという思いがあるからです。

これらの「くらし」「幸せ」「学習」という3つは、これから協同組合のあり方ともかかわって、福祉社会の重要なキーワードになるとを考えています。

---

プロフィール（かみかけ としひろ）

京都府立大学 公共政策学部 福祉社会学科 教授  
当研究所理事・研究委員会代表

1954（昭和29）年、福岡県八幡（やはた）の生まれ

研究テーマ：「現代日本の福祉政策」「ノルウェーのくらしと福祉システム」「協同組合の福祉」「福祉社会の形成と人間の自由」など

学会：社会政策学会、日本社会福祉学会、日本協同組合学会、北ヨーロッパ学会ほか

編著書：『社会福祉講座』全5巻（かもがわ出版）、『協同の仕事おこしで福祉を拓く』（かもがわ出版）、『世界の社会福祉⑥デンマーク・ノルウェー』（旬報社）ほか

2011年3月に卒業予定の大学生・大学院生に対する民間企業の求人倍率が、2001年以来の水準に下がったという。01年は「就職氷河期」といわれた時期だが、その水準への逆戻りだ。今年の高卒の就職内定率も過去最大の落ち込みだった。

景気が悪いからしかたない、という見方もあるだろう。だが、問題は、単に業績が悪くて採用できないというだけのことではない。企業の採用姿勢が変わり、すぐに役に立つ即戦力になるような学生を選びすぐって採用する「厳選採用」が徹底してきたということだ。

03年のころ取材で出会った24歳のフリーターの男性は、四年制大学を卒業し、就職難をかいぐって化学企業に入社した。ところが、わずか半年の研修を経て、工場のパート労働者たちのまとめ役になった。社内のことなどほとんど理解していないのに、年配者を含む熟練パートをまとめねばならず、ストレスから体調を崩し、退職に追い込まれた。「正社員は即戦力」といった非現実的な建て前の下に、いきなり非正社員のまとめ役を申しつけられた悲劇だった。

このように、絞りに絞って、すぐ役に立ちそうな若者だけを選別すれば、当然、採用数は減る。そんな高いハードルを越えて内定をとっても、景気が悪化すると、あっさり「内定切り」だ。採用後も、業績が悪化すると、成果主義などを理由に評価を下げ、自主退職に追い込んでいく。一方で、さらに小回りのきく短期契約の非正規雇用を大幅に増やす。「必要な時に必要な人を」という人間のカンバン方式だ。

背景にあるのは、人件費を「固定費」から「変動費」に切り替えた企業経営の変化だ。

グローバル化による短期経営の中で、短期に利益を出すためには、業績に応じて人件費を変動させられる仕組みが便利だ。これは、さまざまな国が直面している変化といえる。だが、日本社会の問題は、労働市場出し入れは簡単にする一方で、正社員は、相変わらずの新卒一括採用を崩していないことだ。

欧米の労働市場の流動化は、同一（価値）労働同一賃金の徹底で、職務の価値や業績などで値段が決まり、転職しても以前の仕事に近い値

## 若者を採用しない企業の行く末

段で再就職することも可能だ。「仕事の公正な評価」という労働のインフラにあたる部分が未整備の日本では、途中採用の働き手をはじめ、働き手個人の評価がうまくできない。それが不安なため、企業は、学歴や性別といった見えやすい要素で採用できる新卒一括採用を崩せない。学校から会社へすさまなく移行し、会社で職業訓練を受けながら力をつけていった方が崩れているのに、「経験に空白がない」というかつての人物評定のポイントも、そのままだ。このため、新卒採用からこぼれた若者は、「空白を作ると先がない」といわれて他流試合もままならず、留年などの形で大学に塩漬けされるしかない。社会の大きな損失だ。

よしあしは別として、「人間のカンバン方式」なしではやっていけない経営環境になったというなら、政府は、「同一価値労働同一賃金」の公正で客観的な評価方式を早急に確立しなければならないはずだ。これについて、「働き手の価値は会社が決める」といった発言をする経営者や経営団体もあるが、自殺行為だ。働き手の価値を会社が決めるなら、働き手は会社から自由に出ていくことができず、会社は「柔軟な雇用」を円滑にできないからだ。

また、会社が担っていた若い世代の職業訓練を放棄するなら、質のいい働き手を確保するために公的な訓練機関の充実は避けて通れない。フランスは、企業が、賃金総額の1%ほどを公的な職業訓練基金に払うことになっている。特に、公的職業訓練から利益を受ける度合いの大きい派遣会社は、2%程度と多めに払うことが決まっている。持続可能な人材育成のためには、この程度の企業負担はやむをえないはずだ。

欧州では、社会的企業が、政府の職業訓練の補助金で、職場復帰が難しい働き手を受け入れ、現場で働くことを通じて働き手としての技術を伸ばす試みも広がっている。自身が放棄した社会的役割を、他の機関に請け負ってもらうため、特に大手企業は、相応の負担が問わてくる。若者を採用せず、育てない「いいところ」の経営を続ければ、企業の行く末は、良質の働き手不足となりかねない。

(たけのぶ みえこ 朝日新聞編集委員)